



2004年4月30日

森林塾青水

事務局便り

茅風通信 9号



写真：浅川潔

太古より今に繋がる野^{のんび}火かな

今号の目次

「入会慣行」学習会報告 - 三井先生をお招きして - ----1
 40年ぶりの野焼き、復活！
 ・野ん火を目の前にして / 林好一 -----2
 ・僕の体験レポート「野焼きを見たよ」 / 井上滉太 ----4
 ・野焼きの炎（ほむら）立つ / 川端英雄 -----4
 ・火入れ「野焼き」を終えて～裏方秘話～ / 木村伸介-5
 ・「火入れ」実施結果について
 - 成果と今後の課題 - / 清水英毅-----6
 ・原剛さんから励ましのお便り----- 7
 5月～6月の行事日程-----7
 編集後記-----7

「入会慣行」学習会の報告 三井先生をお招きして

去る4月3日（土）午後1時から3時まで、扶桑レクセル（株）会議室にて、現代版「入会慣行」をテーマとした学習会を開催しました。講師に三井昭二先生（三重大学・生物資源学部教授）をお迎えして、「伝統的コモンズとしての入会林野と現代森林コモンズの可能性」と題する先生のご講話をもとに、塾生15名が熱心に学習、意見交換しました。

外部から講師をお招きしての学習会は今回が初めての事でしたが、三井先生の具体的で解りやすいお話のおかげで、現代の「入会」のあり方に関する理解を深めると共に、我々の目指す地元・自治体・市民団体（＝当塾）三位一体となった取り組みと実践を通して時間をかけて練り上げていく進め方につき、自信を深めることが出来ました。

ご多用の中、我々のためにお時間をお割きいただいた三井先生と、ご紹介の労をおとりいただいた滑志田顧問に、紙上を借りて改めてお礼申し上げます。

なお学習会の中で、三井先生から何冊かの参考書を紹介していただきました。そのうち事務局として、特に下記の本を推薦したいと思います。春の「草山」に寝そべてお読み下さい。（事務局）



草山の語る近世（日本史リブレット52）水本邦彦（著） 2003/07/25 山川出版社 800円

山野と人との交わりは、人類発生以来のものでした。日本の歴史にあっても、縄文人と落葉広葉樹の森、古代や近世の大都市建設と山林伐採、中世山岳仏教の展開、杣人や木地屋と林産資源など、多くのテーマがすぐ浮かびます。1890年代に始まる日本の産業革命も、薪や木炭が重要なエネルギー源でした。

本書は、そうした山野と人との関わりを、江戸時代の場面で眺めます。稲作農業が満面開花したこの時代、人は生業を通じて山野と深いつながりを持ち、全国の山々はどこも人の姿で満ちあふれていたのです（本書より）。

野ん火を目の前にして

あの日から一週間、今藤原は例年より十日も早く桜の花が満開となり、藤原ダムも奥利根の山々の雪解けで満たされ、湖面に柳の新緑が映えております。

わずか一週間ですが急速に藤原の春に包まれ、冬の名残の囲いを片付けたり花壇の手入れ等、やわらかな陽射しの中戸外で過ごす時間が多くなりました。

さて、先日の40年ぶりの「火入」は、綿密な計画と準備により実行され、幸いに天候にも恵まれ「快晴無風」とも思える状態での火入で無事終了出来た事をまずもってお祝い申し上げます。

藤原地域のダム建設、水力発電所の建設、そして、観光開発へと続く環境の変化が地域住民の生活様式までも変化させて、それまでの山村生活である自給自足に伴う共有地での茅刈り、薪拾い、家畜の餌の採草、山菜の採集等々、入会地を大切に管理も共同で行なわれ、春一番の行事は雪の消え間を燃やす野焼きが「火入」と言われて行なわれ、野焼きの跡地には青々とした茅が繁り、太いワラビが次々と顔をだしてきます。山菜の時季には町外よりワラビ採りと称して大勢の人たちが来ました。藤原の小中学校でも学校の教育備品や運動用具の購入資金にするため課外授業で児童生徒にワラビ採りをさせたり、村中で山菜採りが行なわれていました。

でも、困った事がその時季にありました。野ん火が発生する事です。広大な上の原高原のどこかで狼煙のような煙が上がります。苗代作りや田植えの最中でも村の人々は消火に駆け付けなければなりません。一度ついた火は原っぱの枯草を焼き果て風を起こして山に駆け上がって行きます。山の植林のカラマツや雑木を炎え尽くすまで何日でも炎えています。

その度毎に消防団の出動もあり、食事の炊出も村のおんなしの仕事で大変です。村では出費が嵩み仕方なく、山に入る一般の人たちより入山許可的な山菜採取券を入山口で販売し経費に当てていました。藤原地区の特別会計として積み立てられて、災害時経費としてつい最近まで使用されておりましたが、残金も少なくなり藤原区一般会計に吸収されたようです。

藤原の人たちは野ん火や山火事の恐さは一番身にしみて感じている住民だろうと思います。



古い生活から一変して、その必要性が薄らぐ生活に慣れるといつしかこの行事も消えてしまいました。しかし、観光開発も底をつき低迷する世相に自然思考が地域の振興、活性化につながる時代となり、先人の知恵と汗の結晶を再び復活し、子孫に伝える事の大切さを今の課題として取り組みが実施された事の意義は非常に大きな事と評価されるものと思います。森林塾青水の皆さん、町役場関係職員、そして、地元の協力者の皆さんが力を合せて出来たこの行事を例年行事として毎年行い、季節の風物詩として多くの人たちに見に来て頂くようになれば素晴らしい事だと思います。

「火入」の準備と打合せの会が前日の夜に行なわれ、その席で火入れの難しさが地元の雲越萬枝さん達からお話がありましたが、大きな「野の火」を見る事は殆ど無い今だから火の恐さを知らない人が殆どです。平成になってからも、今回火入れをする所で火災が数回ありました。一つは、山に遊びに来た人が散らかっていたゴミを片付けてやろうとして集めたゴミを燃やしているうちに傍の枯草にその火が移って気がついた時は自分が火に囲まれていたようです。また、もう一つは、バーベキューが何かをしていて熱い鍋か鉄板をコンロから落として傍の枯草に火が移ったようです。

今回は「火入」の時間を午前 11 時として予定されたが、一日で一番乾燥する時刻であり危険度が大きい、先人の知恵を借りれば午後 3 時過ぎに火入れをするのが常識のようであり、野焼きの残り火が夕暮にはっきりと見えて消火が楽に出来る事だそうです。

今回はこの方法が良いと思います。それと清水塾長にお話をさせて頂きましたが、今回は何事もなくすんだ事ですが、次回からは、「火入」の前に山の神様である「十二様」へ安全祈願をして頂きたいと思います。これも本格的な神事でなくても、形だけの式典として心の支えとすれば気が楽と言うものではないでしょうか、提案とします。今回は幸い風が起きず延焼もなく消火を試みる事もなかったようですが、杉の枝による消火の心得も大切だと思います。雪の消え方、茅場の乾き具合、当日の天気、協力者の集まり方等々次回に

向けて計画は大変だと思いますが、地元と綿密に連絡を取り計画をされる事が、大切だと思います。

炎え盛る野ん火を目前にこの記録を写したくて重い三脚を担いで撮影をさせて頂きました。当日の上毛新聞の社会面に大きな見出しで火入れの記事が載り、写真仲間の数人から早朝に問い合わせの電話がありました。天気も良いので火入れが出来るので来て下さい。賑やかに三脚を並べて撮影が出来ました。

この日は、次の日の上毛新聞によると藤原で 24 度の気温を観測、四月とは思えない陽気の藤原でした。

長い冬から目覚めて、雨呼山には「ダンコウバイ」の黄色い花が香っています。遊歩道の整備も近々実施して、春から秋までお客さんに利用して頂きます。大幽遊歩道もしかりボランティアの協力が待たれます。

また、藤原地域田園空間整備構想事業も今年是用地の買収や設計の仕上げの段階になり平成 19 年度の完成を目指して着々と進行しておりますので、地域の活性化と振興をめざす皆さんのご協力もお願い申し上げます。

完成後は、藤原地域田園空間博物館として地域活性化センター的な用途を機能させて誘客等に一役も二役も役立つ施設になるものと思います。ご協力を重ねてお願い致します。

色々書いて参りましたが、「火入」のあの炎が新しい藤原を創る炎と思い、赤く燃え上がる火勢を忘れられません。以上私の感想とします。ご笑覧下さい。

(写真・文 / 水上町藤原・林好一)



僕の体験レポート「野やきを見たよ」

ぼくは、水上で、4月23日日曜日に野やきを見ました。さいしょにおじさんからスギの葉をわたされて、「火が必要以上にもえたらこれで押さえて消してね」と言われました。

山に火がつけられたら、どこまでもえるのか見ていました。でも、たいくつだったので、ほかの人と火消しに入りました。どうしてスギの葉がもえないのかがふしぎだったのでおじさんに聞きました。すると「枯れた葉はもえるけど、生の葉はもえにくいんだよ。」と教えてくれました。

火はこわかったけど、消すのはおもしろかったです。また、火は雪のおかげで、あまりもえひろがらないこともわかりました。



(井上滉太 / 小学4年生、井上康之会員のご子息)

野焼きの炎立つ

遠景には抜けるような青い空。朝陽を受けて白くかがやく朝日連峰。近景にひきよせればそこには枯れすぎが雪にかこまれている。ふりかえれば里山に木々のみどり。

雪にかこまれた茅原に点火されたのは、10時半。火付け棒の先の小さな赤い火がゆるやかに、弧状に移動してゆく。ひまもなく、白い煙とともに火勢が次第に勢いを増す。やがて熱い空気が周囲にながれ、熱気のカーテンの向こうに人影が行き来する。熱い火の躍動が、赤い炎と白いけむりの競演から真っ黒な灰へとその姿をかえてゆく。いくつものブロックで、競演はいつとなくスピードをあげて拡散し、舞い上がる華やぎと黒い大地をむき出しにする。青い空と白い雪を舞台にした、熱と色のショーはやがてあちこちで合一する。

40数年ぶり、ここ水上町藤原の地に「野焼きの炎(ほむら)」が立った瞬間だ。

緊張と興奮につつまれたわりには野焼きは粛々と進行し、1時間あまりではほぼ予定どおり終了した。あいさつに立たれた月岡区長・雲越良明氏・雲越万枝氏・阿部惣一郎氏などの古老をはじめとする裏方役にまわられた藤原地区のおおぜいのみなさん、設営のほぼすべてと消火体制を献身的に手配された水上町の阿部課長・木村係長などなどの行政のみなさん、それと多忙のなかで東京から駆けつけられた森林塾青水や関係者のみなさんの、三位一体となった活動の結果が今日の野焼きの炎(ほむら)に一段の勢いと色彩を加えることとなった。

50人近くの人々が参加した野焼きの様子は、地元紙・上毛新聞にも大きく取り上げられ、地元振興の一助に、東京の市民団体森林塾青水が、藤原地区の入会地で、地元住民と行政の協力を得て、40数年ぶりに火入れを復活させたと、二日にわたり第二社会面のトップに掲載される快挙となった。

事前準備や当日の運営体制、プレスリリースなどいくつかの反省点を残したものの、次回開催におおきな自信とノウハウを得たことはおおきな収穫であり、今年の当塾年間計画の幸先よいスタートとなった。また、野焼きを行った区画とその他区画における茅の生育や植生の変化などを継続的に観察することにより、フィールドのデザインを決定するうえでの貴重な資料が提供されるものと考えられる。

いづれにしても今回の野焼きの成功は、当塾の構想である「藤原地区まるごと博物館」実現への、第一歩となったといえるのではないだろうか。

あざなえる 想いをこめて たつ炎 (冗句)

(川端 英雄)

火入れ「野焼き」を終えて～裏方秘話～

「無事終わった」が私の素直な感想だ。

そもそも野焼き（地元では野ん火）との言葉を耳にしたのは昨年の今頃第1回フィールドスタディーの時、我々のフィールドがその昔どのように使われていたか古老ヒアリングの席上、林親男さんからだった。「昔は火を入れた。」その言葉を聞き逃さなかった清水塾長は「聞きましたか。できれば復活させたいなぁ」と言ったのを憶えている。

それから幾度かのヒアリングを重ねるにつれ「できれば復活させたいなぁ」が「やりましょう」に「やりましょう」が「来年やる」に変わった。それに反比例するかのように、地獄の日々、いや調整の日々が始まった。確かに40数年前までは管理された野焼きが行われていたが、ここ数十年は山火事のメッカになってしまった場所である。そこに火を入れようとしているのだから一筋縄ではいかない。事あるごとに野焼きの話を持ち出し「火を入れていい茅にしましょう」と言っても、それはそれ山火事のメッカ、いい茅になるのは解っていても「とんでもねえ」との言葉が返ってくるだけだった。あんまりそんな話をするものだから「あそこが火事になったら木村さんが最初に疑われるな」と言われるようになった。

それが年6回のフィールドスタディーで塾の活動を理解し始めたことと、なにより地元古老で茅刈りを行い茅が市場価値を持ったことで「やってみるか」に変わった。それから町の条例をひっくり返し『火入れ条例』なるものを発見。所管の建設農林課長及び総務課長と協議し行政手続を進めた。「許可には隣接地の所有者の承諾がいる。」との総務課長の言葉で、広川塾頭と私で隣接している3者（武尊山観光開発（株）（株）コクド、手小屋共有林組合）に承諾と協力をお願いしに回った。特に、隣接に施設を持つ（株）コクドの雲越支配人の英断にて承諾と協力を得られた時、火入れ（野焼き）が現実のものになってきた。もちろん森林塾だけでやれるわけではない。かつての野焼きを覚えている古老・民宿組合・田園構想委員会・案内人クラブ・中区長さん等知りうるすべての団体・個人に協力をお願いした。

もうひとつの問題が防火帯だ。残雪を防火帯にするグットアイデアは同時に余計な作業が増える。ブルドーザーを所有している雲腰万枝さん（山口在住で「八雲食堂」のご主人）に除雪をお願いに行ったのが2月の終わり「そんなバカ気なこと」と言いながらも林利根雄さん（民宿「とんち」ご主人）と共に2人で引き受けてくれることになったのだが、実施計画にある除雪が終了するはずの3月末になってもいっこうに始まらない。遠回しに催促する。塾長からは矢のような状況報告を迫られる。『ふざけるなバカヤロー』など言うことは微塵も思わずひたすら催促と苦しい言い訳を繰り返す。そんなこんなでなんとか除雪が終わったのが火入れ実施予定日の6日前の4月12日、後は天に任し乾くのを待つ。幸いにも天候が続き順調に乾いていく。始めからこうなるのを判っていたかのように雲腰万枝さんが当日使う火入れ道具を書き出したメモを「大体おれの所で揃う」と言いながら手渡してくれた。

準備が整い後は地元従事者が揃ってくれるのを祈る、ついにその日が来た。天気は晴天、風は無い。総勢47人が塾長の号令の下とはいかなかったが、雲腰万枝さん・雲腰良昭さん・阿部惣一郎さんの手で松明から茅に火が入り、順に持ち手が変わりながら歓声と共に30分程で予定した総ての茅が灰になった。40数年ぶりの火入れの復活は、すべてが順調にいきすぎた感はあるが、なにより塾長の情熱により地元で火を点け協力者が予想以上に多かったこと、この地で培われた『結い（えいっこ）』助け合いの気持ちが疼いたのではないかと勝手に思っている。

翌日現場に行き焼き尽くされた茅原を見て一句「茅原や つわものどもの 夢の後」どこかで聞いたような・・・。（水上町観光商工課・木村伸介）



写真：笹岡達男

「火入れ」実施結果について 成果と今後の課題



4月18日(日) 午前10時集合。絶好の野焼き日和に恵まれて、待望の火入れ実施。皆さん、大成功とおっしゃる。しかし、つらつら省みると、収穫も大なる反面、反省材料も多かった。

今後の改善事項、取り組み課題につき、以下に要約。会員諸兄、特に参加者各位ならびに幹事諸兄と問題意識を共有するとともに、反省材料については下記以外にもあるかと思いますので、各位の御所見をお寄せいただきたく、お願いする次第です。(清水英毅)

成果～収穫；今後も継続、定着すべき事項、など

- 1) 条例にもとづく計画的野焼き(=火入れ)が、およそ40年ぶりに復活できた
- 2) しかも、地元・行政・市民団体(=当塾)が三位一体となって、事前了解・相互協力体制のもとで実施。
当日作業参加者=塾生20人(うち地元5)、地元10、町田工業3、役場関係者8 その他共計、47人
- 3) かつ、雪国固有の藤原流とも言うべき伝統的手法によって、出席者全員参加型で行われ、その方法をOJT学習できた
- 4) 事前のパブリシティ活動の結果、地元有力紙他の報道するところとなり、当塾活動に対する地元の理解促進に少しはなったか

要改善・今後の取り組み課題

- 1) 伝統的火入れ方法の記録と習得
 - ・ 自分たちでできるようにする → 火入れマニュアルの作成と活用
 - ・ 次世代に継続する
- 2) 実施日の集合・開始時刻の変更
 - ・ 午前中の火入れは、風のあることが多くリスク大。当地では夕刻が恒例
 - ・ 今後は土曜日の正午集合。昼食と事前準備作業を挟み、午後3時を火入れ開始とし、予備日を翌・日曜日とする
- 3) 当日を含む事前準備作業を地元任せきりにしない
 - ・ 事前の除雪作業ならびに当日の杉葉(火消し用)の切り出しや、火付け棒の用意など、ほとんど全て、地元の雲越万枝・中島利根男の両氏任せきりになってしまった
 - ・ 来年以降は、我々塾生も少なくとも当日の直前準備作業は必ず参画・お手伝いできるようにする
- 4) 開始前に自然の恵みに感謝し、安全を祈ることが出来なかった
 - ・ 今年はゆとりがなく、地元の山神たる「十二様」に祈りを捧げることを忘れてしまった
 - ・ 好一さんに「我々の目の前の山々すべてが御神体山ですよ」と教えていただいた。来年からは出来るようにしたい
- 5) マスコミ報道において、当塾としての目的が十分に伝えられなかった
 - ・ “地域振興”が前1面に出てしまった。誤りではないが、これは地元・行政の主として期待する事であり、当塾の主眼とする所ではない
 - ・ 当塾の狙いは下記にある点を再認識、強調すべき

直接的には、全国でも希少なススキ草原(茅場)の再生・利活用を図る

地元・古老の指導を仰ぎつつ、先人の知恵たる入会・共有地の管理手法を学び・活用する

地元・行政・市民団体(当塾・関係者)が三位一体となって、入り会いながら実施することにより、現代版「入会慣行」即ち、新しい時代にふさわしい共有地(=コモンズ)の管理・利用のあり方を探る

- ・ 来年以降は、パブリシティ原稿に上記を入れておく

以上

原さんから励ましのお手紙

原剛さんより励ましのお便りをいただきました。ご本人のご了承をいただきましたので、以下全文そのままご披露申し上げます（清水英毅）

火入れのニュース、メッセージ、拝読。

ここに指摘されている事柄に全面賛成します。

マクロな意味で、上毛新聞の地域振興はよしとして、青水の青雲の志についていずれ、毎日新聞にて全国へ発信すべしの感を強くしました。

ミクロの光景は、いちいちさもありません。参加せず、発言の資格なしですが、志ある人々を全面に立てて事をはこぶ方が、運動体には応わしいと思います。

ワラビ、山菜の季に是非。

（原 剛）

5月～6月の行事日程

先に年間行事計画で案内した行事日程のうち、5月～6月の予定は下記の通りです。各自、希望ないし役割分担が決まっている行事について、参加の確定をお願いします。

特に5月15日（土）～16日（日）は、今年度第1回目のフィールドスタディを兼ねて、地元の皆さんと一緒に「山の口明け」行事を予定しています。お仲間お誘いあわせの上、ふるってご参加下さい。

- | | |
|----------------|-------------------------------|
| 5月 7日（金） | 幹事会 |
| 14日（金）～16日（日） | 講座「森林コモンズ村・ふじわら」（第1回） |
| 15日（土）～16日（日） | 「山の口明け」行事（フィールドスタディと清掃大会を兼ねて） |
| 22日（土）～23日（日） | 第21回全国「森林の市」（代々木公園） |
| 29日（土） | 麗澤中学「樹木観察会」（同中学キャンパス） |
| 6月 4日（金）～6日（日） | 講座「森林コモンズ村・ふじわら」（第2回） |
| 5日（土）～6日（日） | 団体受け入れ（1）「NHK蕎麦打ち教室」一行 |
| 12日（土）～13日（日） | 団体受け入れ（2）「寺島お絵かき教室」一行 |

詳細問い合わせは下記へ

- ・ については森林文化協会；小川、海老沢03-5540-7686

その他については当塾・東京事務所；扶桑レクセル・監査役室＝清水03-3345-1390

又は現地事務所；水上町役場・観光商工課＝木村0278-72-2111

以上（事務局）

編集後記

好一さんに言われて、大切な事を忘れていたのに気づいた。火入れ許可証が下付された3月24日以来ずっと、地元の山の神・十二様（じゅうにさま）と雨水を司る神・おかみ（ ）に火入れ当日の快晴無風をひそかに祈り続けていた。4月18日、その願いがかなった途端に感謝の心を忘れてしまった。我等が塾の合言葉は「飲水思源」であった筈なのに！大自然の恵みに対する感謝の気持ちと、豊作・安全祈願。来年からと言わず、5月に予定の「山の口明け」は地元の皆さんに習い、共々武尊の山に合掌することから始めたい。好一さんありがとうございました。

ボランティア、怪我と弁当は自分もち。そして、当塾のモットーは「楽しみながら良い汗をかく」。あれこれやりたいな、と思いつらしている内は楽しいのだが、やろうと決めた途端に苦しみが始まる。ボランティア活動が過ぎて仕事がおろそかになったり、周囲に迷惑、心配かけたりしない様に。反対に、仕事のせいでボランティア仲間に皺を寄せたり負担をかけすぎたりもしたくない。言うは易く行ふは難し、ですね。（青）